

日本フランス語学会第 351 回例会 (2025/6/14, 青山学院大学)

Heureusement que P の統語論的分析

宮腰 駿 (東京大学大学院) ・ 田中優生 (東京大学大学院)

要旨

本発表は、(1)のような「副詞 + que 節」という形式をとる構文 (Adv que 構文) を統語論的観点から分析するものである。特に副詞 *heureusement* に que 節が後続する場合に注目して議論を行う。

(1) *Heureusement qu'il est là.* (Furukawa 2005, chapitre 7 のタイトル)

幸いにも、彼はいる。

Adv que 構文では、que 節の内容は「既構築 (*préconstruit*)」されていると解釈され、テーマとして働くことが先行研究において指摘されている (e.g. Furukawa 2005 ; Guimier 1998 ; Paillard 2021)。そして、Furukawa (2005) は Adv que 構文の que 節内部では左方遊離構文によるテーマ化の容認度が低いことを指摘している。しかし、用例観察を行うと、que 節内部において左方遊離構文が生じている場合が確認できる (宮腰 2024)。この場合は左方遊離要素のフォーカス化が生じていると解釈することができる。

本発表では、最初に *heureusement que* の意味特徴について議論を行う。この議論に基づき、Adv que 構文における que は Anscombre (2016) や Furukawa (2005) が想定しているような特殊なマーカーではなく通常の補文化辞 (*complémentiseur*) であり、que 節内の文が意味部門 (LF) においてトピック化のための移動を起こすという想定を示す。これによって、上述の que 節内部におけるテーマ化・フォーカス化の非対称性が「相対的最小性 (*Relativized Minimality* ; Rizzi 1990)」の原理によって説明できると同時に、que 節内部における倒置 (*inversion*) の可否についても予測を産む。

参考文献 (一部抜粋)

- Anscombre, J.-C. (2016), “Les constructions en *adverbe que p* en français : Essai de caractérisation sémantique d’une matrice lexicale productive”, *Cahiers de lexicologie* 108, 199-223.
- Furukawa, N. (2005), *Pour une sémantique des constructions grammaticales : Thèmes et thémacité*, Éditions Duculot.
- Guimier, C. (1998), “Pourquoi peut-on dire *Heureusement que Pierre est parti*, mais pas **Malheureusement que Pierre est parti ?*”, *Revue de Sémantique et Pragmatique* 3, 161-176.
- 宮腰駿 (2024) 「*Heureusement que P* の用法に関する一考察」『筑波大学フランス語フランス文学論集』39, 21-35.
- Paillard, D. (2021), *Grammaire discursive du français*, Peter Lang.
- Rizzi, L. (1990), *Relativized Minimality*, MIT Press.